様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ２０８４３

研究課題名（和文）声と表情に関する感情リテラシーの発達アウトラインの解明と教育的支援の開発

研究課題名（英文）The Investigation of developmental changes of emotional literacy:Implications for educational support

研究代表者
渡邊　弥生（Watanabe, Yayoi）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：００２１０９５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,800,000円

研究成果の概要（和文）：いじめなどの学校危機予防や、子どもの生きる力を育むために、子どもの社会情緒的スキルの発達を幼児期から促す教育的意義が国内外で指摘されている。しかし、こうした支援策のベースとなる感情リテラシーの発達のアウトラインについてのエビデンスがほとんどない。本研究は、「表情」「声」というノンバーバルなコミュニケーションを通して、他人の感情を理解する能力やスキルがどのように獲得されるか、その発達のアウトラインについて研究を重ねてきた。喜びや怒りといった基本感情についての音声あるいは表情刺激をプロの子役や俳優に依頼してデータベースを作成し、幼児から成人迄の発達的変化を検討し、その成果を論文及び学会で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
いじめなどの学校危機を予防するために社会情緒能力の育成について、実証的な研究はほとんどなされていない。本研究では幼児期から成人までコミュニケーションにおけるノンバーバルな手がかりからの感情理解の発達アウトラインを明らかにすることであるが、挑戦的研究として学術的意義が高い。近年、ソーシャルエモーショナルラーニングという教育的フレームワークが重視されるとともに、OECDや文部科学省においても社会情緒的能力の育成が重視されている。本研究でのエビデンスとして、すでに幼児、高校生を対象とした研究は学術雑誌にも成果を発表しており、学校危機予防の支援へ活用できる可能性が高く社会的意義も大きいと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The educational significance of promoting the development of children's social and emotional skills from early childhood to prevent school crises such as bullying and to enhance children's ability to live effectively has been recognized both domestically and internationally. However, there is scarce evidence on the developmental outline of emotional literacy, which underpins these support measures. This study has continuously explored how abilities and skills to understand others' emotions are acquired, focusing on the developmental outline of these capacities through nonverbal communication such as "facial expressions" and "voice." We have created a database with audiovisual stimuli representing basic emotions like joy and anger, using professional child actors and actors. We have analyzed developmental changes from infancy to adulthood and have shared the findings through papers and academic conferences.

研究分野：発達心理学

キーワード：社会情緒的能力　感情理解　感情リテラシー　感情知性　発達　音声　ノンバーバル　情動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

子どもの感情リテラシーとして、感情理解・感情表出・感情マネジメント・感情の活用を考え、とりわけ、まずは感情理解の発達のアウトラインを明らかにすることを大きな目的とした。先行研究をレビューした上で、言葉による感情知性の発達については研究が重ねられていたが、声、仕草、といったコミュニケーションにおいてのノンバーバルな側面についての発達はほとんど体系的に検討されていなかった。研究方法にも課題があり、表情や仕草についても静止画を研究刺激としたものばかりであり、動画をもとにした刺激が用いられていなかった。データーベースとして活用されている研究刺激も外国人のものが使われており、日本人の子どもを対象としたデータベースがないことも課題であった。さらには、自閉症の研究など、臨床的な研究が散見され、定型の子どもたちを中心とした発達の様相についてエビデンスが得られていないなどいくつもの問題が残されていた。

こうした社会情緒能力とも言える感情リテラシーの発達アウトラインについてのエビデンスの不足は、不登校などの学校危機予防の問題としても指摘されていた。いじめなどの背景には、対人関係におけるソーシャルスキルや感情知性の問題が指摘されていたが、感情リテラシーの発達に関するエビデンスの不足は、発達に応じてどのような介入をすれば良いのか、その支援のあり方にまで関係するからである。また、未来を生き抜く力として OECD は国際教育を牽引する立場から、社会情緒能力や社会情動スキルの育成を Education 2030 として取り上げていたり、欧米ではソーシャルエモーショナルラーニングという社会情緒的能力という非認知能力が子どもたちの学力の成果やメンタルヘルスに関係し、ひいてはウエルビーイングと関連しているというエビデンスを整理し、5 つのコンピテンスを育てるなどの教育的フレームワークの必要性を主張しはじめていた。本研究は、こうした 5 つのコンピテンスにも含まれる感情リテラシーを取り上げ、日本からもエビデンスを発信する必要性を強く考えることからの取り組みであった。

２．研究の目的

子どもたちのコミュニケーションにおける感情リテラシーとして、「表情」「声」「仕草」「動作」からの他者の感情理解の発達を明らかにすることを目的とした。幼児期から成人までを対象として、このノンバーバルな手がかりを通して、どのように他人の感情理解をしていくのか、探索的に検討することが目的であった。とりわけ、音声に焦点をあて、幼児、小学生、中学生および高校生、大学生の音声による感情の理解、最終的には、表情・音声・仕草を含めた感情理解の発達のアウトラインを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

実際の日本人の子どもの写真や声、動画などの材料を元にした研究がなく、データーベースを作成することから着手した。基本感情に関しては、Ekman らの研究をもとに、喜び、悲しみ、怒りといった基本感情をもとにしたが、最終的には６つの基本感情である喜び・怒り・悲しみ・嫌悪・驚き・恐怖をもとに、音声、表情、動作を含む刺激材料を作成した。

幼児期から中学生及び高校生の音声による感情理解については、３つの基本感情を女優また演技経験のある男性にその気持ちで表現した音声を録音しデータベースとした。言葉そのものからの感情理解を避けるために「ただいま」などの短い挨拶をもとに作成した。

2023 年から 2024 年にかけては、先述した音声による感情理解の各発達時期の様相が明らかになったことから、基本感情を３つから６つに増やした。音声だけでなく、表情や仕草もデーターベース化して、発達アウトラインを明らかにする方法を選定した。幼稚園及び小学校ではテープレコーダーを用い、前者は個別に小学生及び中学生はクラス単位で実施した。高校生においては、全校放送などを用い、質問紙の中の感情の選択肢をもとに回答させた。

最終年度においては、６つのシナリオをもとに、プロの子役（小学生男子１名、女子１名）の演技から、各感情につき、正面・右 45 度・左 45 度の３方向の静止画、６つの音声、動画を刺激材料とするデータベースを作成した。服装を統制するため同じ T シャツとジーンズを着用してもらいプロのカメラマンに依頼して、デジタル刺激を作成した。

実験の画像のサイズは 1440×1080pixel、音声は 48kHz、ステレオ 16bit とした。刺激提示は感情表情刺激（男女２種類）と、角度（３条件）と表情６種類の 36 であった。刺激の提示は、PC などで刺激をランダムに提示し、どの感情として理解したかをキーボードを押すことによってデーターを収集した。

４．研究成果

声による感情理解の発達については、幼児については、2024 年の法政大学文学部紀要の第 88 号に、「Developmental of Emotional Prosody Recognition among Japanese Preschool Children」に成果をまとめた。年中から年長にかけて基本感情の理解が進むことが明らかにされた。児童期及び中学生においては、小学１年生では大半がこの基本感情は正確に理解するものの、年齢に関係なくどの学年でも適切に回答できないものがおり、この原因を明らかにする研究の必要性が指摘された。児童期の成果については国際心理学会で発表した。中学生についての成果は国内の

学会で発表した。高校生においては、「音声からの他者感情理解と共感性との関連」として教育心理学研究で 2023 年に成果として刊行された。「悲しみ」の正答率が低く，「喜び」と「怒り」の音声刺激を正確に判断できる生徒が比較的多いことなど感情によって正答率が異なることが明らかとなった。また自由記述をもとにした計量テキスト分析からは，多様な回答が寄せられたことや、本来は「喜び」の感情をもって他者が発話していた声を「怒り」として受け取る場合が少なくない可能性が示唆された。高校生の結果は、古典的な基本感情ありきの学説ではなく、意味や解釈が社会や文化によって異なるといった構成主義的な理論の可能性も示唆する結果となった。6 つの基本感情をもとにした、音声だけではなく、表情の静止画、仕草を含めた動画についての実験は、すでに大学生を対象にデータを得ており、今年の教育心理学会で発表予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Oikawa Chisato、Tashiro Kotomi、Iwashiro Mira、Omori Mika、Watanabe Yayoi	４．巻 71
２．論文標題 Relationship Between Empathy and Understanding Others’ Vocally Expressed Emotions	５．発行年 2023年
３．雑誌名 The Japanese Journal of Educational Psychology	６．最初と最後の頁 291～304
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/jjep.71.291	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Watanabe,Y/Takizawa,Yu・Adegawa ,A.	４．巻 88
２．論文標題 Development of Emotional Prosody Recognition among Japanese Preschool Children	５．発行年 2024年
３．雑誌名 法政大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 79-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 渡辺弥生	４．巻 360
２．論文標題 親になる」プロセスを支える子育ての環境づくりーソーシャル・エモーショナル・ラーニングのビジョンの共有	５．発行年 2022年
３．雑誌名 都市計画　日本都市計画学会	６．最初と最後の頁 78-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Watanabe Yayoi、Ikeda Maiko、Saeki Elina、Higashida Mayu	４．巻 11
２．論文標題 Social-emotional learning and class climate among elementary-aged students in Japan	５．発行年 2022年
３．雑誌名 International Journal of School & Educational Psychology	６．最初と最後の頁 207-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/21683603.2022.2075997	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 原田 恵理子、渡辺 弥生	4．巻 24
2．論文標題 ソーシャル・エモーショナル・ラーニングによる高校生の ソーシャルスキルとレジリエンスへの効果	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育実践学研究	6．最初と最後の頁 1～14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50841/kyoikujissen.24.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Aizawa Noriko、Omori Mika	4．巻 9
2．論文標題 The mediating effect of cognitive appraisal on the relationship between sleep habits and the stress response among Japanese female college students	5．発行年 2021年
3．雑誌名 BMC Psychology	6．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s40359-021-00602-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Watanabe,Y.et.al.	4．巻 1
2．論文標題 Be happy to be successful: a mediational model of PERMA variables	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Asia Pacific Journal of Human Resources	6．最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/1744-7941.12283	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 渡辺弥生	4．巻 163
2．論文標題 子どもの感情リテラシーの発達と具体的支援	5．発行年 2020年
3．雑誌名 発達	6．最初と最後の頁 20-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Watanabe Y., Motomura, Y.,& Saeki E.,.(2020)	4．巻 3
2．論文標題 Development of Emotional Literacy and Empathy among Elementary-Aged Japanese Children.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 International Journal of School & Educational Psychology.	6．最初と最後の頁 1-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/21683603.2020.1837699	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 渡辺弥生	4．巻 63
2．論文標題 子どもの社会性や感情の発達と支援	5．発行年 2020年
3．雑誌名 野間教育研究所紀要	6．最初と最後の頁 67-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡辺弥生	4．巻 1
2．論文標題 低学年のソーシャルスキル・トレーニング	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育技術小一小二	6．最初と最後の頁 13-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡辺弥生	4．巻 26
2．論文標題 保育保健の基礎知識　こどもの「感じる力」や「人と関わる力」を伸ばすために	5．発行年 2020年
3．雑誌名 保育と保健	6．最初と最後の頁 105-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　2件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 渡辺弥生
２．発表標題 心理専門職と発達心理学の役割
３．学会等名 日本発達心理学会第33回大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 渡辺弥生
２．発表標題 子どもの社会性を育てるAGENTとしての大人の影響
３．学会等名 日本発達心理学会第33回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 渡辺弥生
２．発表標題 日本の教育にSELを定着させるには
３．学会等名 日本SEL研究会第12回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 渡辺弥生
２．発表標題 幼児の声からの感情の理解の発達
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第31回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 渡辺弥生
２．発表標題 感情力の発達と支援のあり方ーソーシャルスキルトレーニングの活用
３．学会等名 日本学校心理学会第23回福岡大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田代琴美・岩城美良・翁川千里・渡辺弥生
２．発表標題 高校生における感情コンピテンスと声による感情理解の発達
３．学会等名 日本教育心理学会第63回総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 阿出川あすか・渡辺弥生
２．発表標題 児童期における声による感情理解の発達と感情コンピテンスの関連
３．学会等名 日本教育心理学会第63回総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Watanabe,Y. & Adegawa,A.
２．発表標題 Development of Emotional Literacy: Evidence from Emotional Understanding through Voice.
３．学会等名 International Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Oishi, A., Nagasaki, K. & Omori, M.
２．発表標題 Examination of effects of telecommunication on post- communication reassurance among adult and elderly parents: Focus on video-communication.
３．学会等名 The 14th biennial conference of Asian Association of Social Psychology.（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 合澤典子・千葉咲香・大森美香
２．発表標題 エンターテインメントの心理的効果の検討 ―コロナ禍ストレッサーと精神的 健康 の関係に及ぼす調整効果
３．学会等名 日本健康心理学会第34回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Watanabe,Y.
２．発表標題 Emotional Understanding through the Voice.
３．学会等名 Pacific Rim International Conference on Disability & Diversity（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 渡辺弥生
２．発表標題 コロナ禍における育ち：社会性と感情に着目して
３．学会等名 日本発達心理学会第32回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 atanabe N ,Ikeda M ,Watanabe,Y.,Iida,J. ,Martinsone,B.,,& Paredes,S
２．発表標題 Cross-Cultural Perspective on Family Stress During COVID-19 Pandemic: Finding Helpful Support and Coping Services for Families With Children'
３．学会等名 The 12th Asian Conference on Education　（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 田代琴美・渡辺弥生
２．発表標題 幼児はどの感情制御方略が良いと考えているか？
３．学会等名 日本発達心理学会第32回大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計6件

１．著者名 渡辺弥生・小泉令三	４．発行年 2022年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 246
３．書名 ソーシャル・エモーショナル・ラーニング	

１．著者名 渡辺 弥生	４．発行年 2021年
２．出版社 ナツメ社	５．総ページ数 240
３．書名 完全カラー図解 よくわかる発達心理学	

１．著者名 渡辺弥生（監修）	４．発行年 2021年
２．出版社 北樹出版	５．総ページ数 169
３．書名 対人援助職のための発達心理学	

１．著者名 汐見稔幸・渡辺弥生監修	４．発行年 2021年
２．出版社 主婦の友社	５．総ページ数 191
３．書名 エール　プレ思春期のママへ	

１．著者名 渡辺弥生	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 267
３．書名 人間教育の教授学ー一人ひとりの学びと育ちを支える	

１．著者名 渡辺弥生・西野泰代	４．発行年 2020年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 233
３．書名 『ひと目でわかる発達ー誕生から高齢期までの生涯発達心理学』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

法政大学文学部渡辺弥生研究室
https://sites.google.com/site/emywata/home?authuser=0
法政大学文学部心理学科
https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001800/profile.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大森　美香 (Omori Mika) (50312806)	お茶の水女子大学・基幹研究院・教授 (12611)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関